

## OS-20 「私」の境界と意味の現れへの構成論的アプローチ

オーガナイザ：飯塚 博幸 (大阪大学)  
宇野 良子 (東京農工大学)

「私」の境界 (すなわち自己や他者の認識) と意味の現れを相互作用という観点から捉えようというのが本セッションの主旨である。学問領域を超えて同じ興味をもった研究者が集まることのできるような議論の場を設けたいという思いから、あえてテクニカルタームの使用を控えたセッション名とした。具体的に目指したところは二つある。まず、相互作用の研究を、実際の現象を見て分析してきた言語学やジェスチャー研究そして認知科学などの研究分野と、それをミニマムなモデルで捉えようとしてきた人工生命や計算機科学などの研究分野の知見をもち寄り、単純で具体的な身体性から複雑で抽象的な意味が現れるそのメカニズムを構成論的に発見する方法を探ろう、というものである。この観点からは本セッションは2007年11月に統計数理研究所で行われた研究会『動的システムの情報論7 言語のダイナミズム』の続編ともいえる。そして、もう一つ目指したのは、心理学者の Bruno Galantucci らによって近年提唱されている「実験記号論」というアプローチの今後の方向性を模索することである。実験記号論は、被験者のペアにツールを与え、その使い方に原始的な言語やコミュニケーションの現れを観察する、という構成論的な言語・コミュニケーションの研究手法である。以下、本セッションの発表を、三つに分けて紹介する。

午前の部では、身体運動と自己や他者の認識の関わりに着目した三つの発表が行われた。飯塚は実験記号論の手法を用いて、運動と感覚を制限された人々が相互作用したときに現れる他者の認識とコミュニケーションについて発表した。大澤博隆氏 (筑波大学) の発表はロボットを操作する人が、別の人にロボットの運動を通して意図の伝達を行う際に、いかにコミュニケーションのための相互作用戦略を生成するかについてであった。嶋田総太郎氏 (明治大学) は自己と他者の運動に活動するミラーニューロンに着目し、自己と他者運動での活動の違いと、自己の運動に微小な「ずれ」を含む場合の活動について行った認知実験について報告した。

午後の部の前半では、数理的な側面の強い発表が四つ行われた。有江浩明氏 (早稲田大学) はロボットが環境と相互作用したときの予測性に見る自己と他者認識について、Arnold Solvi 氏 (名古屋大学) は相互作用の相手の行動観測からの相手の内部状態の推定に関する計算機シミュレーションについて発表した。金野武司氏 (北陸先端科学技術大学院大学) は相互作用したときの意味形成過程における行動の確実さと情報量の遷移について実験記号論的アプローチを行い、李冠宏氏 (北陸先端科学技術大学院大学) は金野氏が人で行った実験を、エージ



図1 OS実施風景

ントシミュレーションとして行い、人の実験が難しいスケールでのシミュレーションの結果について報告した。

午後の部の後半では、現象の観察に重点を置いた発表が5件あった。池上高志氏 (東京大学) はアートパフォーマンスを例に、意味の形成には世界の実在性が本質であることと、実験における枠組みの限界を指摘した。竹内勇剛氏 (静岡大学) は相互作用のパターンと相手をコンピュータと人間のうちどちらであると判定するかの関わりについての発表を行った。田村香織氏 (北陸先端科学技術大学院大学) は世の中には存在しないものについて描画を通じて伝える実験を行い、その結果をメタファーの理論に基づき論じた。宇野は原始的な文法的要素が現れるような実験記号論の手法として、被験者が相互作用そのものを楽しむような実験を提案し、認知文法の観点から分析した。細間宏通氏 (滋賀県立大学) はトランプゲームの「ババ抜き」を遊ぶ人々の観察から、一見簡単に思われるこの遊びだが、実際にプレイヤー達は、その進行のルールについて遊びの途中で度々交渉していることを会話と行動の分析から示した。

このように、セッション全体を通して、運動から意味が現れる段階、また記号などのやり取りから言語的な洗練されたルールが形成される段階について、発表・議論が行われた。

全体討論では、「私」と「意味」を考えるうえでミニマルなモデルや実験をする意義について議論がなされた。人工生命の言い方では、オープンエンドでない環境において生命や進化を考えることの意義は何であるのか、ということになる。そもそもこれは、「実験記号論」という枠組みが、当初からミニマムなモデルを生成する分野と実際のコミュニケーションの観察分析を行う分野の連携により行われていることが示すように、この手法において本質的な問題である。本セッションでも特に最後の行動・会話分析の発表に代表されるような、現象に密着した研究分野とともに実験記号論の今後の方向性を探ろうとしているのも、そのバランスを重視してのことである。「生きた実験記号論」に向けて引き続き議論していきたい。今回貴重な場をつくって下さった参加者、関係者、そして大会実行委員の皆様、有難うございました。

〔飯塚 博幸 (大阪大学), 宇野 良子 (東京農工大)〕